

令和元年6月26日現在

機関番号：32403

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07060

研究課題名（和文）世界史の中の秩父銘仙 1873-1940：地域と人びとの声

研究課題名（英文）Chichibu Meisen in the Global History of Silk Spinning 1873-1940

研究代表者

井上 直子（Inoue, Naoko）

城西大学・経済学部・准教授

研究者番号：80727602

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：勤務構内に撮影グループを結成し「銘仙のデジタル・アーカイブ」作成に取り組んだ。撮影地の行政やコレクターと連携しながら撮影準備を進める一方で、天然繊維として最後に紡績工程が機械化された「絹」（絹紡糸）が、18世紀からヨーロッパで続く半奢侈の拡大、ファッション産業の創出に寄与したことを明らかにした。また木材パルプから化学的に取り出したセルロースを合成して作り出すレーヨンによって代替されたことを、レーヨンの絹紡糸生産者組合の事例から証明することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

絹系紡績の技術、伝播、最終製品について研究を行う過程で、それを18世紀以降ヨーロッパで続く「半奢侈」流行（「ファッション」産業の成立）を推し進める要因として位置付けられた。日本の経済史研究において「ファッション」に光を当てた研究は限られているが、18世紀のヨーロッパ都市史／社会史研究者と交流する中で絹系紡績を半奢侈やファッションの世界史の中に位置付けることの新鮮さを自覚し、銘仙がもつ世界史的意義を内外研究者に主張することができた。銘仙デジタル・アーカイブは立命館大学アート・リサーチセンターのサーバーを利用して実現され、今後関心を持つ世界中の人々にとって資料価値の高いデータを残すことができた。

研究成果の概要（英文）：Through the research project, the significance of the mechanized silk-spinning industry given the changes in the use and value of silk and marketing was pointed out. It accelerated the development of 'demi-luxe' /fashion industry in 19th-century Europe and bridged to rayon industry both in Europe and Japan through the popularization of silk. Other than that, thanks to the support of KAKEN, the Meisen Digital Archive was created by a photo shooting unit led by Inoue.

研究分野：経済史

キーワード：銘仙 デジタル・アーカイブ 半奢侈 絹紡糸 絹系紡績 秩父 伊勢崎

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、絹糸系の社会経済的意義は日本の学会においてほとんど認識されていなかった。特に経済史分野で「ファッション」自体が研究対象となることはほとんどなく、糸や布についても、その使用感や意匠、最終製品の流通構造といった消費サイドの関心が反映されることは稀である。一方で、19世紀のヨーロッパにおいて機械化が完成され、20世紀前半の日本においてその産業が振興された絹糸紡績に着目した本研究は、ヨーロッパにおける18、19世紀の都市史、社会経済史、消費史などと相性が良く、当初から国際学会での報告の機会にも恵まれることとなった。

### 2. 研究の目的

本研究は、明治期より昭和初期における、秩父および埼玉・群馬県境地域における「銘仙(着物)」やその原料となった「絹紡糸」の生産・流通構造を解き明かし、その社会経済史的インパクトおよび世界史的脈を明らかにするものである。1920年代から第二次大戦後まで全国的に大流行した銘仙の学術的研究は、未だ伊勢崎を対象とした経済史分析などに限られる一方で、そのデザインの先進性や当時の社会経済に与えたインパクトの大きさは国際的にも大きな関心を集めている。本研究は産業革命以前より不断に廉価化へと進み続けた繊維産業の世界史的時代背景、そして「伝統の発見と西洋化」が同時に進行する日本独自の歴史的背景を踏まえ、改めて銘仙が地域社会、日本社会に及ぼした意義を多面的に分析すべく、まずは散逸しつつある史料(文書、銘仙、生産機械)の記録、そして関係者へのインタビュー調査を迅速に遂行し、その成果を国際社会に向けて発信しつつ、未来に向けてデジタル・アーカイブとして保存し公開することが目的である。

### 3. 研究の方法

これまで収集した資料および新たに入手した資料を用いて既存研究を整理した上で、地域経済の特色、銘仙や絹紡糸の生産流通構造についての経済史的分析を行った。その過程でこれまでの応募者の研究を整理し、2016年度にアルバータ(加)で発表した論文Meisen: The First Accessible Luxury in Japanをベースとして2017年6月3日開催されたKyoto Symposium: Popularizing Fabrics and Clothingにて'Emergence of Silk Industry and Meisen, the First Accessible Luxury in Japan: 1870-1930'を発表し、ハードフォードシャー大学ジョン・スタイルズ教授ら国内外の研究者と議論することができた。WEHC(MIT)以降、ウィルミントン(米)で収集したレーヨン関連資料と日本のそれを併せて分析し、2018年3月には絹紡糸-レーヨンスフの連関について踏み込む事もできた。一方で、勤務校のゼミ活動の一環として、学生を巻き込みながら文書やモノ資料(銘仙、生産機械など)を撮影、記録した。コレクターや行政を通じて対象の選定を行い、インタビュー調査を開始し、そこから関係者のネットワークを広げて聞き取りを行うことができた。

### 4. 研究成果

絹糸紡績の技術、伝播、最終製品について研究を進める過程で、絹紡糸を18世紀以降ヨーロッパで続く「半奢侈 demi-luxe/populuxe/accessible luxury」流行(「ファッション」産業の成立)を推し進める要因として位置付けることができた。

すなわち梳毛・綿紡績の技術を転用し天然繊維として最後に機械化された絹紡糸は、使用感や価格の面で生糸と綿の中間として位置付けられ、産業のスケール・メリットを生かして絹糸(奢侈)を代替し、ヴェルヴェット、リボン、縮緬などに加工され、ヨーロッパの室内装飾やクリノリンやバツスルといった布をふんだんに使う19世紀半ば以降の女性ファッションを支えたのである。

1870年代の日本にもたらされた絹糸紡績の最終製品として最も重要なのが銘仙である。日本の経済史研究の中で「ファッション」自体に光を当てる研究は限られていたが、銘仙という日本における絹糸紡績の最終製品を世界史の中に位置付けることの新鮮さや意義は、18世紀のヨーロッパ都市史、社会史などの研究者と交流する中で自覚された。

絹紡糸の最大の生産国フランスにおいて1914年にはこれをレーヨンによって代替する方向性が決まり、以降、さらなる標準化・大量生産を可能とする「生糸を代替する新素材(new silks)」の改良・開発がヨーロッパ・アメリカにおいて急激に進行する。さらには1930年代におけるレーヨン屑を紡績するスフ生産の興隆により、繊維は無限の多様性を獲得した。

またこの研究支援によって実現できた銘仙のデジタル・アーカイブにおいて、立命館大学アート・リサーチセンターのサーバー利用を許可され、資料価値の高い多くの画像データを残すことができた。一連の作業及びそれに対する反応(マスコミ報道等)を通して、文化行政や観光振興に資する「公共財としての銘仙」の可能性を認識した。

### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

井上直子「機械制絹糸紡績とファッションの民衆化 1790-1930」『城西大学経済経営紀要』第36巻(2018年3月) 査読有

Naoko Inoue, 'Spun Silk to Artificial Silk: the 19<sup>th</sup> and 20<sup>th</sup> Centuries Demi-luxe'  
(城西大学院研究年報) 32巻(2019年3月) 査読有

〔学会発表〕(計5件)

Naoko Inoue, 'Emergence of Silk Industry and Meisen, the First Accessible Luxury in Japan: 1870-1930' in Popularizing Fabrics and Clothing: Kyoto Yuzen Industry in Broader Context 1600-1970 (立命館大学アート・リサーチセンター2017年6月3日)

Naoko Inoue, 'What Was Silk? How Notions of Silks Were Changed by the Mechanized Spun-Silk Yarns' in Popularizing Fabrics and Clothing: Reconstructing What was What of Fabrics and Dress 1600-1930 (法政大学市ヶ谷キャンパス2017年6月10日)

Naoko Inoue, 'Spun Silk to Artificial Silk: the 19<sup>th</sup> and 20<sup>th</sup> Centuries Accessible Luxury Brought by the Development of Spinning Technology and Synthetic Fibers'  
WEHC BOSTON 2018 (Boston MIT 2018年7月31日)

井上直子「絹らしさとは何か：1870-1930年代絹紡糸とレーヨンの代替性から考える」日本家政学会(服飾史・服飾美学部会)(共立女子大学2019年3月2日)

Naoko Inoue, 'Redefining Rayon in 20<sup>th</sup>-Century Europe, U.S. and Japan: Towards Unlimited Varieties of Mixing (Symposium Textiles and Materiality: Mixing Fibres between East and West, 16<sup>th</sup>-20<sup>th</sup> Centuries, University of Warwick in Venice', VENICE (2019年3月16日)

〔図書〕(計1件)

Naoko Inoue, 'Silk Waste, Spun Silk, and Meisen kimono: Technological Transfer and Emergence of New Industry in Japan from the late 19<sup>th</sup> Century to the 1930s' in Miki Sugiura (ed.), Anne McCants, Beverly Lemire, Giorgio Riello, Irina Potkina, Naoko Inoue, Renate Pieper, *et al.*, "Linking Cloth/Clothing Globally: The Transformations of Use and Value, C. 1700-2000", Hosei University Publishing (2019年3月), pp.229-254.

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等  
<http://lccg.tokyo>

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：金井 珠代、菅谷 奈保、三國 信夫、江良 亮、安城 寿子、新井 正直（敬称略）

ローマ字氏名：Kanai Tamayo, Sugaya Naho, Mikuni Nobuo, Era Akira, Anjo Hisako, Arai Masanao

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。